



美々川・ウトナイ湖の自然

みうら じろう
日本野鳥の会北海道ブロック
支部連絡協議会事務局
長
日本鳥類標識協会北海道
バンダー連絡会代表
1945年京城師範卒

三浦 二郎

1. 小さな自然から大きな自然を見通す

ウトナイ湖の湖畔に小さなハンノキが立っています。その枝の先に1羽の小鳥がずっと止まって、ヒューヒューチョリチョリと歌い始めました。

バードウォッチャーは早速双眼鏡で観察して、下面の輝くような黄色と背面のチョコレート色、そして胸のこげ茶色のネクレスを確かめてシマアオジだと納得して双眼鏡から目を離します。

カメラマンは三脚を立てて望遠レンズのピントを合わせてパチリとシャッターを落として、ニヤリとほくそ笑みをもらします。

この一本のハンノキと1羽のシマアオジは、こうしてバードウォッチャーの網膜と、カメラマンのフィルムに、ウトナイ湖畔の風景の一面を切り取って印象されたのです。そのこと自体はアウトドア志向の中でのすばらしい事実だったと思われるます。



〈シマアオジ〉

しかし、この一本の木、1羽の小鳥を通して、もっと大きくウトナイ湖の自然を見通すことはできないでしょうか。旧ソ連の或る岩石(地質)学者は、「岩石は偶然と必然の産物である」と云ったといひます。吾々は道ばたの石ころを見ても、ただの石ころとしか認識しませんが、1個の石こ

ろでもそれができるためには地下のマグマが冷え固まったものかも知れませんが、或いは山から岩石が浸食されて川によって運搬された土砂が海底や湖底に堆積して岩石化したものかも知れません。それは何千年、いや何万何億年の地殻変動の所産であって、それは必然の歴史を経たものであると共に、その過程の中には多くの偶然も重なり合っているものと考えられてよいものなのでしょう。実際1個の石ころでも、それを岩石プレパラートの切片にして偏光顕微鏡で観察したならば、多くの結晶や斑晶が見られ、それは決して一様なものでなく、複雑な形や大きさのものがうまく組み合わせられて一体のものになっているのが分かります。これは岩石という無機質の物体ですが、その造形の妙は驚くばかりで、そういう物体ができるだけの必然性は勿論あるにしても、多くの偶然が重なり合っていることもうなずかれるわけです。

バードウォッチャーがハンノキの枝先に止まっているシマアオジを観察でき、カメラマンがそれをねらってシャッターを落としたこと自体、その人達にとっては偶然のチャンスに恵まれたわけですが、この事象についての偶然とは、そこにハンノキが生えていたこと、そしてその枝先にシマアオジが飛んできてずっと止まったことを指して云ったものです。しかしそれはまた単に偶然として片づけるのではなく、ハンノキがそこに生え、シマアオジが止まるべくして止まった必然性もそこにはあるのです。

北海道でハンノキとされている樹木には、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ、ハンノキ(ヤチハンノキ)の3種があり、ミヤマハンノキは高山に、ケヤマハンノキは乾燥した山地に、ハンノキは湿

潤なやちに生育しております。ウトナイ湖畔にハンノキが生えているのは、そこが湿地であるからです。しかも水気の多い湖畔に近く生えているハンノキ程、樹高が低くなります。ウトナイ湖の水位が下って乾燥化が進むと、この背丈の低いハンノキもきっとぐんぐん大きくなるはずですが、ウトナイ湖サンクチュアリのネーチャートレイル（自然歩道）の周囲の木立ちは、コナラ・ミズナラと混生してハンノキも生えておりますが、それは結構な樹高と太さの大木です。それは乾燥化が進んだ土地なので生長が早まったからです。湖畔の水際の背丈の低いハンノキの樹齢は、木立の中の大木になっているハンノキとそれ程大きな差はないのです。たとえばヤチハンノキとして湿潤な所に生育する樹木ではあっても、あまり水気が多すぎ、しかも湖面からの冷気が吹きつける所というのは、決して快適な生育環境ではないのです。そういう劣悪な環境には、ナラ類は生育できず、ヤナギ類がそれにかわっており、ヨシやマコモ等の水生植物が繁茂するようになっています。

シマアオジという小鳥は、ヨシやマコモだけの草原でもあまり好まないし、樹高が5mを越す森林でも駄目です。背丈の低いハンノキが疎生する程度の草原が一番の気に入りのようです。

ところで、シマアオジという小鳥は割合春遅くなって渡来する夏鳥で、秋もあまり深まらないうちに姿を消してしまいます。どこから来て、どこへ飛んで行くのでしょうか。北海道にやって来る夏鳥は、南方から本州を經由して飛来しますし、秋になると本州へ渡り、更に東南アジア方面で越冬する種類が多いものです。鳥類の渡りの謎を解明するために、鳥類標識調査という調査法があります。記号番号が刻印された軽金属のバンドを脚に装着して放鳥するのでバンディングとも云っていますが、その調査でも本州經由の確証が続々得られております。しかしシマアオジだけは本州經由の渡りコースをとらないらしいのです。バンディングでもそうですし、観察例も本州では殆どないのです。シマアオジはどこからどこを通過して北海道に渡来するのでしょうか。どうもロシアの沿海州あたりから、いきなり日本海を飛び越えて来るのではないかと考えられています。まだ確証はありませんが、もしそうであるとすればすばらしい能力をもつ小鳥だと感心させられます。

そのシマアオジは、北海道全域で確認されてい

ますが、道東地方の生息密度が最も高いようです。石狩低地帯もかつては密度が高かったようですが、都市化が進んで次第に生息適地が狭められており、ウトナイ湖周辺の湿地が残された唯一の地になっております。

こう見てくると、一本のハンノキの枝先に1羽のシマアオジが止まったということは、ウトナイ湖畔での必然と偶然の一断面であると云うことができるのです。

2. 美々川・ウトナイ湖の自然のおい立ち

前章でウトナイ湖畔の一断面を切りとってその自然のありようを紹介したのですが、もっと大きな視野と長い歴史で考えてみましょう。

北海道は2億年前から始まった日高造山運動によって1500万年ごろから背骨のように日高山脈ができ、80万年前からはじまった火山活動で北海道の屋根と呼ばれる大雪の山々がそびえるようになったのです。その大雪山に源を発する北海道一の大河石狩川は、石狩低地に流れ落ちたあと向きを南にかえて太平洋に注いでいたらしいのです。

ところが支笏火山が大爆発を起こして、大量の火砕流を流して古石狩川の流れを千歳あたりでせき止めてしまいました。せき止められた石狩川は向きを西にかえて、日本海に流れ始めました。川で運ばれた土砂が堆積して今の肥沃な石狩平野ができて行ったのです。今から約32,000年くらい前の、北海道の地形の原型を作った大きなできごとだったので。それ以来、支笏カルデラにたまった水が支笏湖になり、支笏湖を水源とする千歳川は石狩川に合流することになったのです。

一方で、支笏溶結凝灰岩の上には、恵庭や樽前の火山から噴出した火山灰が幾層にも厚く堆積して、千歳市の南東に駒里丘陵を形成し、古石狩川はしっかりせき止められ、その下部から地下水を湧出すようになりました。今の美々川の源流部です。

地下水というのは、降った雨が地下にしみ込んでそれが地表に湧き出す水ですが、降った雨が短時間で地表に出て来るといった簡単なものでなく、何十年もかゝって出てくる水もあるようです。美々川源流部のわき水もそうであるらしく、火山灰層を通過して行くうちにろ過されて、何十年もかゝってそれはそれは磨きぬかれた清澄な水になってわき出しているのです。



＜美々川源流＞

また一方で、6000年前地球が暖かくなって海面が上昇して内陸に海が入り込んだ時代があります。縄文時代の人達が高台で生活していた時代で、それを縄文海進といっています。その時代は前に述べた駒里丘陵の近くまでひたひたと海がおしよせたはずですが。そのため美々の高台あたりや新千歳空港のあたりに縄文時代の人達の生活の跡が残っているわけです。しかし再び冷涼な気候になって、海水面が次第に下がって現代に至っているのです。そして低い部分に湖や沼がとり残され、そのまわりは広い湿原になったのです。その湖の一つがウトナイ湖であり、美々川流域の湿原であるわけです。そして美々川源流部のわき水が集まって美々川となり、ウトナイ湖に注ぎ、勇払川となって太平洋に流れ出ているのです。従って古石狩川の流れとは全く別のものとなって、何千年もの長い歴史を刻んで今の美々川やウトナイ湖の自然が形成されて行ったのです。

3. ウトナイ湖は環境教育の絶好の場

ウトナイ湖は1991年11月に永年の運動の結果“特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約”としての「ラムサール条約」登録湿地に指定され、1992年11月には日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリのネイチャーセンター内に、北海道新聞創立50周年記念事業助成によって環境教育センターが設置され、名実共に環境教育の拠点ができたのです。

この写真は、ウトナイ湖に日本野鳥の会第1号のサンクチュアリが創設された当時、今から11年前のウトナイ湖畔の情景です。ハクチョウにパン屑などをやっている子供達は、もう今では立派な大人に成長しつつあります。野生の鳥獣に餌づけをすることの是非を論ずる向きもありますが、こうやって身近に大型の野鳥と接する機会を持たせたということは、この子供達にとって“自然に親しむ”という貴重な原体験になっているはずです。

自然に親しむということは、環境教育—自然保護の出発点です。その出発点になることは、ハクチョウへの餌やりに限らず、ウトナイ湖畔にはいくらかでも数限りなくあります。

どういう出発点から始めるにしても、それを適切にアプローチして自然保護の理念と意欲・力働に高めるのが環境教育の使命です。その拠点とフィールドが整えられてきたというのは、ウトナイ湖の価値をますます高めることになったのです。

4. 放水路計画は美々川・ウトナイ湖の自然を台なしにする。

こうして見てくると、美々川・ウトナイ湖の自然はすばらしいし、そこが千歳市・苫小牧市の開発地域に接するかけがえのないものであるばかりでなく、札幌市やその近郊の衛星都市の人達にとっても、アウトドア志向を満足させる場でもあります。

また今までこそ低迷していた苫小牧東部工業基地への企業進出は、トヨタ自工の進出をバネにして今後は大きな発展が期待されます。進出企業の従業員にとってもレクリエーションと教育の場として大きく貢献することになろうと予想されます。

しかし、千歳川放水路が、駒里丘陵部を掘削し、その地下水脈を分断することになれば、美々川とその流域湿原及びウトナイ湖の美しい自然が根底から壊滅するのは目に見えることです。ましてどのルートを通るにしても幅250~450m、長さ40kmもの巨大な放水路が通されてしまえば、北海道の東と西の生態系を完全に分断してしまうのです。これまで美々川・ウトナイ湖の自然を愛し、いとおしんできた人達の努力は水泡に帰してしまうのです。

日本のODA援助のあり方が、現地の自然を破壊することに作用し、現地の人達の批判を浴び、これからはその反省に立って“地球にやさしい”



<ウトナイ湖のオオハクチョウ>

を合い言葉にした開発援助であるべきで、そのためには環境教育は必須のものとなっております。放水路ができてしまえば、ウトナイ湖での環境教育は反面教師的な教材ばかりを使うことになりかねません。

こういう意味から、千歳川放水路計画は絶対容認できるものでなく、阻止すべきだという思いを新たにするものです。

5. ウトナイ湖にタンチョウを

北海道に生息する特別天然記念物タンチョウは、地域の人々や関係機関の手厚い保護施策が効を奏して、最近では500羽を超す生息数になってきました。そのこと自体は大変喜ばしいことですが、その生息は道東4支庁地域に限られており、冬季間は阿寒町・鶴居村の給餌場に集中しております。

しかし、このまま推移してよいものでしょうか。タンチョウ研究の専門家の間でもいろいろと危惧する声あげられるようになりました。

一つには営巣場所の過密によるテリトリー確保の問題、二つには近親結婚による遺伝子劣化の問題、そして三つ目は給餌場集中による伝染病発生の問題です。その他にも問題はありそうですが、今この地域での生息数がピークにさしかかった時期に有効な対策を講じておかないと、それこそ千載の悔いを残しかねないと思われま

あるがまゝの自然は、できるだけ手を加えずに残すことが大切ですが、人間が手をかけて守り育てたものは、人間の責任において有効な手段を講じてやるべきです。

タンチョウの保護にとってのなし得る有効な手段とは、タンチョウの生息地を拡散し、現在の過密な生息数を分散してやることではないかと思われま

分散の適地としてはウトナイ湖周辺の湿原が第一候補としてあげられます。タンチョウが餌として好むタニシはウトナイ湖にあり余る程生育しており、営巣に適したヨシ原は釧路湿原に勝るとも劣らず繁茂していますし、越冬のための不凍河川も湧水も備わっております。

一時、タンチョウをウトナイ湖にという構想が立てられたことがあったようですが、千歳川放水路計画が出されたばかりに沙汰止みになったま

もともと千歳は、往時生息していたタンチョウになぞらえてつけられた地名です。それを往時の状態に復活するのに、何の支障もないはず

千歳川放水路計画を断念し、美々川・ウトナイ湖の自然をより豊かなものにする提言をタンチョウ復活によせて稿を終ります。

写真提供：日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンター